

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	前原 裕樹
2. 審査委員	主査：(兵庫教育大学教授) 佐藤 真 副主査：(岡山大学教授) 住野 好久 委員：(兵庫教育大学准教授) 森廣 浩一郎 委員：(兵庫教育大学教授) 渡邊 隆信 委員：(上越教育大学教授) 梅野 正信
3. 論文題目	バフチンの対話理論による教育実践解釈および教育実践開発に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 前原 裕樹 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記の通り審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成26年1月26日（日） 15時00分～16時00分 場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス 講義室3</p> <p>(1) 学位論文の構成と概要</p> <p>①論文の構成</p> <p>【序章】</p> <p>【第1章】 授業における「対話」に関する先行研究の外観</p> <p>【第2章】 方法と本研究の構成</p> <p>【第3章】 出会いの材「クロツグミ」における対話性</p> <p>【第4章】 授業における発言に対する児童の「応答」プロセス</p> <p>【第5章】 授業における児童の対話スタイルに関する研究</p> <p>【第6章】 授業における対話の変容—発言の「宛名」を手がかりに—</p> <p>【第7章】 教室における、教師および方法に内在する権力・権威構造の理解を促す対話型事例シナリオの開発—『23分間の奇跡』を事例として—</p> <p>【終章】</p> <p>②論文の概要</p> <p>本論文は、バフチンの対話理論をその理論的背景とし、教育実践の分析と解釈、および実践の開発について論じるものである。</p> <p>学習者の学びを考える際には、その学びの質が重要な観点となる。他者と学ぶことの重要性は、学びの共同体論や学び合い論など、これまでいくつかの指摘がなされてきている。しかしながら、これらの授業における関係論的な学びと内容論的な学びとが結び付けられて論じられてこなかった。その要因としては、以下2つのことが考えられる。第一に、教師や観察者が授業において、学習者の関心や意欲の向上を重要視し、学習者が他者と関わっている、といった状況を学びと認識していることである。第二に、学習</p>

といった、内容を深めている学習者の思考過程やその内実を捉えることは、学習者の学びの質を検討する上で、大変重要だといえる。

これまで、対話理論を援用し、材および関係論的な学びを統合して、学習者の学びの可視化を試みる研究は十分ではなかった。また、対話の重要性の認識を促す実践開発は未開であった。

そこで、本論文ではバフチンの対話理論を援用し、「授業における対話性」「学級における児童の対話の変容過程」「学級における授業の対話の変容」の3つの視点から、その実践解釈を行い、その上で「教室における権威・権力」に関する実践開発を行っている。

本論の第1章では、これまでバフチンの対話理論の鍵概念、とくに「多声性」「宛名」といった鍵概念の整理を中心に行っている。バフチンの対話理論のさらなる理解とその他の対話諸理論を整理することを通して、対話論についてのさらなる見識を深めていく。

第3章から6章では、小学校の継続的な授業観察を行い、学習者の学びの可視化をバフチンの対話理論を援用することによって試みた。すなわち、バフチンの対話論を理論的背景として、授業における児童の学びに内在されている関係論、および内容論の相互作用を検討し、その変容プロセス、および、児童の学びの詳細を明らかにしようとするものである。これは、教育実践における新たな解釈や理解、つまり、教室における事象に対し、意味づけを行うことを通して、教育実践および授業実践の可能性を追求するとともに、教育実践における理論的仮説を生成しようとするものである。

そして、第7章では、これまでの研究において明らかになったことを基に、教師の立場から、「自らが有する権威・権力と葛藤しながら、どのようにして学習者にとっての真の学びを創造していくことができるのか」、といった教室空間における対話と権威・権力の関係性について、事例シナリオを作成し、教師を目指す学生に教授するために、実際の現場で起きている出来事を題材にした対話型の教材、および事例シナリオを作成・実施および検証をする実践的な研究を同時に行っている。

本研究は、これまでのわが国の授業論研究では不十分であった分野であり、学習者の学びや対話を論じる上で、大変重要な観点である。

(2) 審査過程

本論文は、小学校での話し合いを中心とした授業に焦点を当て、教室空間における児童の対話の変容、およびそのプロセスから児童の学びの質について分析検討し考察している。また、教職を目指す学生に対し、対話の重要性についての認識を促す実践開発している。論文はⅢ部7章から構成されている。

第Ⅰ部第1章では、教室談話に関する先行研究、とりわけバフチンの対話論を理論的背景とするものを分析し、バフチンの対話理論について述べている。そして、児童の話し合い活動と教材の関連および教室内での関係性の変容が結び付けて論じられていない点を指摘し、3点の分析すべき課題を具体的に導出している。また、対話の重要性をどのように促すのか、についての実践開発が十分に蓄積されていない点を指摘し、実践開発を課題としてあげている。第2章では、対話を捉える研究方法を整理し、分析課題に応じて、授業観察記録、T-C記録、インタビューを組み

合わせた方法、および学生の記述分析といった本論文全体の研究方法が論じられている。

第Ⅱ部第3章では、出会いの授業の観察による質的分析から、納得していないように見える児童らを、「対話を続けている児童」として解釈し直す必要性について指摘している。そして第4章では、1名の児童の他者への関わりに関する授業観察の分析から、児童が「共感的・受容的な他者」から、「意味交渉の場に導く他者」へと変容していくプロセスを明らかにしている。第5章では、2名の児童の参与観察による質的な分析から、固定的な対話スタイルの児童も、他の対話スタイル(応答的な)の児童によって、意味交渉過程に巻き込まれることで、その学びが深化する可能性を指摘している。第6章では、時期の異なる授業を比較分析から、対象である材を間に置き、対象について自分の言葉と他者の言葉を突き合わせ、互いに変容することにより、そのような過程で理解を深めたり、考えや解釈が変化したりしていくその変容を明らかにしている。

第Ⅲ部7章では、教職課程において、対話、とくに権利・権力について認識を促す実践を開発し、ある程度の効果が実証されている。

そして、終章では、論文を総括し、本研究の意義と今後の課題を論じている。

本論文は、対話といった観点から、児童および学級の変容プロセスに迫り、教師の教材解釈を含めて、授業の文脈や状況と児童の理解とのダイナミズムを記述した点、そして、教室において対話の重要性の認識を学生に促すために、権威・権力に焦点をあて、実践を開発した点の2点において、独自性が高い学術論文であり、授業研究、とりわけに学び論に対する新たな視座を提示した論文であると評価した。

(3) 審査結果

以上により、本審査委員会は、前原 裕樹 の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するのにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。